



## 人生を決定づけた言葉

株式会社  
平成建設  
社長  
あきもと ひさ お  
秋元久雄

「金を残して死ぬ者は下、仕事を残して死ぬ者は中、人を残して死ぬ者は上」

これは明治から昭和初期にかけて活躍した医師・官僚・政治家、後藤新平の言葉です。この言葉との出会いは三十九歳のときでした。目に飛び込んできた瞬間、大きなショックを受けたのを今でも鮮明に覚えています。当時、私は中堅ゼネコンの営業部長で、社長の次くらいの給料をもらっていたし、その前の会社でもトップセールス。蓄えもあつたし、プライドも高かった。それが「金を残して死ぬ者は下」と。衝撃でした。

お金は大事です。私も二十六歳までお金がなくて苦労しましたから、お金のありがたみは知っています。でも蓄財するだけでは餓鬼なんですね。目的を持って貯め、有効に使わなければ意味がないということ。たとえば江戸時代の京都の豪商・角倉了以。彼は貿易で儲けたお金を大堰川や高瀬川などの河川の開発に注ぎ込みました。一方で、「美田は残さず」の諺ことわざに反してお金を蓄え、相続でもめている人もいます。金を残しただけでは生き方として価値は低いとわかるようになりました。

このように、角倉了以は金を残さず仕事を残しました。しかし、後藤新平は「仕事を残して死ぬ者は中」といいます。たとえ仕事を残しても、その遺志を引き継ぎ、担う人材がいなければ意味がないからです。だから「人を残して死ぬ者は上」なのです。吉田松陰は二十七歳のときに松下村塾を開き、三十歳で斬刑に処されましたが、わずか二年の間にその塾から高杉晋作や久坂玄瑞をはじめとする維新の英傑を多数輩出しています。

それを思ったら、自分もその真似まねごとぐらいしなくてはと、社員を大工や職人として育てる会社をつくりました。

幸せなことに私は、創業から今まで苦しいと思うことがありませんでした。この言葉が、いつも私を追い立て、励まし、導いてくれたのです。創業から二十数年、大工や職人は育ちながら総勢二〇〇名になりましたが、目標は「匠・千人」の組織です。人を育て、人を残す。若い人が日々成長していく姿を見るのは何にも代えがたい喜びです。